



# 新藤兼人賞

SHINDO KANETO AWARDS



## 第 10 回新藤兼人賞

2005年12月9日（金）東京會館 11階 ゴールドルーム

主催：協同組合 日本映画製作者協会

特別協賛：富士写真フイルム株式会社／報映産業株式会社

協賛：松竹株式会社／東宝株式会社／東映株式会社／角川映画株式会社

コダック株式会社／株式会社 I M A G I C A

SARVH 賞提供：一般社団法人 私的録画補償金管理協会

## 金 賞

宮藤官九郎『真夜中の弥次さん喜多さん』監督・脚本



**受賞者プロフィール** 1970年生まれ。宮城県出身。本作が長編映画初監督作品となる。

91年より松尾スズキ主宰の大人計画に参加。大人計画作品で俳優として活躍すると共に、自ら作・演出も手掛ける。映画脚本：日本アカデミー賞最優秀脚本賞など映画賞を総なめにした『GO』（01/行定勲監督）、劇場大ヒットをおさめた『ピンポン』（02/曾利文彦監督）、『木更津キャッツアイ 日本シリーズ』（03/金子文紀監督）、『アイデン&ティティ』（03/田口トモロヲ監督）、『ドラッグストア・ガール』（04/本木克英監督）、『ゼブラーマン』（04/三池崇史監督）、『69 sixty nine』（04/李相日監督）など。TVドラマ脚本：「池袋ウエストゲートパーク」（TBS/00）「ロケット・ボーイ」（CX/01）、「ぼくの魔法使い」（NTV/03）、「マンハッタンラブストーリー」など。（TBS/03）「木更津キャッツアイ」（TBS/02）放送部門にて芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。TVバラエティ構成作家：「TV'S HIGH」（CX/01）、「笑う犬の冒険・発見・情熱」（CX/99~03）。パンクコントバンド「グループ魂」では構成と「暴動」という名でギターを担当、02年にはアルバム「Run 魂 Run」でメジャーデビューを果たす

## 銀賞

内田けんじ『運命じゃない人』監督・脚本



**受賞者プロフィール** 1972年生まれ。神奈川県出身。高校生の時に映画製作への道を志す。'92年サンフランシスコ州立大学芸術学部映画科に入学。8ミリから35ミリまでの映画製作技術をはじめ、脚本技術も学ぶ。帰国後、自主製作した『WEEKEND BLUES』が第24回ぴあフィルムフェスティバル「PFF アワード2002」にて企画賞(TBS)[作品の優れた企画性(着眼点・アイディア・発想など)に対して贈られる]、ブリリアント賞(日活)[最も光輝く才能を感じさせる作品に対して贈られる]をW受賞し話題となる。『WEEKEND BLUES』は、知人の体験談から着想をえて、失恋して絶望していた28歳サラリーマンの「消えた一日」が、組み替えられた時間軸の中で、徐々に明らかになっていく長編物語を描いたが、劇場デビュー作となる本作では、さらに物語の構成力に磨きをかけ、人物描写の豊かさを発展させたエンターテインメント性の高い作品となっている。

2005年カンヌ国際映画祭〈批評家週間〉正式出品作品 フランス作家協会賞(脚本賞)・最優秀ヤング批評家賞・最優秀ドイツ批評家賞・鉄道員賞(金のレール賞)受賞

## SARVH

### プロデューサー賞

#### 李鳳宇『パッチギ!』エグゼクティブプロデューサー



#### 受賞者プロフィール

1960年、京都市東山区生まれ。朝鮮大学外国語学部卒業後パリに留学。  
86年よりトクマ・ジャパンにて委託プロデューサー。89年配給会社シネカノンを設立。K・キエシロフスキー監督の『アマチュア』から配給業務スタート。その後の配給作品に、『穴』『デカログ』『苺とチョコレート』『フープ・ドリームス』『風の丘を越えて〜西便制〜』『カップルズ』『ウォレスとグルミット』『ブラズ!』『ケス』『マイネーム・イズ・ジョー』『シュリ』『JSA』『北京バイオリン』『オアシス』『殺人の追憶』『永遠のモータウン』『スキャンダル』『誰も知らない』『オオカミの誘惑』『マラソン』『南極日誌』『クレールの刺繍』他多数。現在まで配給作は150本以上を数える。1992年に初めてプロデュースした『月はどっちに出ている』では国内外の50以上の映画賞を獲得、興行的にも大ヒットした。その後は『東京デラックス』(1995)『ビリケン』(1996)『のど自慢』(1998)『ビッグ・ショー!〜ハワイに唄えば〜』(1999)『あつもの』(1999)『MONDAY』(1999)『KT』(2001)『さよなら、クロ』(2003)『ゲロッパ!』(2003)『パッチギ!』(2005)などを製作。94年より劇場経営にも着手、現在5館9スクリーン

を運営する。05年11月に韓国にCQN ミヨンドンをオープン。5スクリーンのうち1スクリーンを日本映画専門に上映する。2005年11月現在

---

## 審査員講評

---

### 金賞・銀賞選考委員講評

#### 審査委員長：佐々木史朗（オフィス・シロウズ）

今年の新藤兼人賞は多数の作品、監督の中から次の四人の監督に絞り込んで審査委員会で論議し選考しました。「真夜中の弥次さん喜多さん」の宮藤官九郎さん、「運命じゃない人」の内田けんじさん、「大停電の夜に」の源孝志さん、「樹の海」の瀧本智行さんです。そして長時間におよぶ議論の結果、新藤賞金賞を宮藤官九郎さんに、新藤賞銀賞を内田けんじさんにお贈りすることになりました。

宮藤さんについては舞台からテレビ、さらに音楽の分野での活躍を私たちは以前から注目しておりましたが初監督作品をご自分の文体で貫き、一見かたやぶりにみえる方法が、原典の持つ明るい閉塞感とでもいうべき類似性と空気感におきかえらえた力量に敬意を表します。内田さんの作品で際立つのはシナリオと映画を支える風格のある演出力でした。時制を交錯させる手法は今までも数多くの映画であつかわれていますが、内田さんは過去の作品に墮することなくオリジナリティにあふれる才能を示されたことに敬服し、可能性に期待します。

残念ながら賞を逸した源さんに関しては「停電した東京の一夜」という難しいモチーフにチャレンジしエンタテイメントとして一定の成果をもたらされた点、また「樹の海」の瀧本さんはスケール感のある演出力に審査員から「このような才能が日本映画に存在してくれていることへの感謝と必要性」との意見が強く出されたことを特筆したいと思います。

#### 進藤淳一（フィルムフェイス）

今年もたくさんの新人監督が世に出て日本映画界もますます活発になって行く様に思い嬉しい限りです。

しかし思いの外たくさんの新人監督作品があり戸惑ったと言うのが各審査員の正直な感想だと思います。その中でも特に私が注目をしたのが「真夜中の弥次さん喜多さん」「樹の海」「運命じゃない人」「誰がために」でした。

「真夜中の弥次さん喜多さん」は観客を意識したエンターテイメントになっているうえ、突き抜けた面白さがあった様に思いました。ほかの作品も新人監督らしい着眼点やエネルギーを感じましたが何回かこの賞の審査員を引き受けていて、毎回審査会が白熱をするのが楽しみになって来ました。私があげた4作品以外にも沢山の候補作がありました。皆これからが楽しみな監督ばかりでしたがこの中で何人の監督と一緒に仕事ができるのかと期待で胸が膨らんでいます。

#### 利倉亮（レジェンド・ピクチャーズ）

今年は悩みに悩んだ。映画とは…なんて言いたくなったり、昔の映画は良かった…なんて愚痴りたくなる。私だけだろうか？映画製作は人を感動させる仕事として、飯を食っていける楽しい仕事。記録に残る作品と記憶に残る作品。経営者としては記録に残る作品を作りたいが、製作者としては記憶に残る作品を製作したい。今年の新藤賞の多くは記憶にも記録にも残らない作品がならんだ。劇場からしたら配給したくない作品、TSUTAYAさんからしたら棚に並べたくない作品。製作人が作りたかったのだろうか考えられない。

作品の中では「真夜中の弥次さん喜多さん」は審査のときに、大ファール作品と誰かが言う惜しい作品。私に笑いのセンスが乏しいため、面白くはない。でも、記憶には残る作品であった。儲かっていればごめんなさい。



「運命じゃない人」、すみません。観れなかったです。が、出来の良い作品と評判。必ず拝見します。先輩に何がうれるか分からないので自信がない昨今です、と泣きをいれると、自分が作りたいものを製作すると言う。納得出来るような出来ないような、ちょっとカッコいい話。

### 三宅澄二 (ミコット・エンド・バサラ)

宮藤監督、内田監督、受賞おめでとうございます。今年も、例年以上に白熱した審査会となりました。昨今の元気な日本映画界を象徴するように、幅広いジャンルに渡り、魅力的な作品が数多く製作されている結果だと思えます。その中で、お二人の作品が選ばれたことは価値あることだと思えます。

宮藤監督の「真夜中の弥次さん喜多さん」は、映像化が難しい原作を素晴らしいセンスで一級のエンタテインメント作品に仕上げられたことに敬意を表したいと思えます。内田監督の「運命じゃない人」は、日本で成立しづらいコメディというジャンルに正面から取り組まれ、素晴らしい作品に作り上げられたことに新たな可能性を感じることができました。このお二人のみならず、今回の審査会で新たな日本映画の可能性を感じることができ、プロデューサーとして嬉しく思うとともに、頑張らねばと思う審査会となりました。

### 安田匡裕 (エンジンネットワーク)

「真夜中の弥次さん喜多さん」への金賞授与について。発表された映画は全て歴史的時代的所産であるという確信で言えば、この作品は紛れもなく「時代のモノ」だと思う。時代は人々をとり込み、人々を動かし場合によっては人々をとりこにしてしまう。ではその時代を誰が作っているかと問われれば、人が作っているとしか言いようがない。この映画の成り立ちや佇まいを考えると、そんなことを思わざるをえない。「面白ければいい」という考え方が全てに勝るといふクリエイティブがこの映画のど真ん中に位置しているからだ。願わくば、このような風合いの映画が来年は何本か出てくると日本映画も面白くなっていくのではないかと思う。

### 山上徹二郎 (シグロ)

近年の作品数の多さは基本的に歓迎すべき事態だとは思いますが、反面新人らしい荒削りでも勢いのある映画が少なくなっているように感じています。テクニックやアイデアに走りすぎているのでしょうか。プロデューサーとして組みたいと思う監督を選ぶという当初の賞の方針と、作品として優れているものを選ぶという視点の間で、今年も判断が揺れました。正直な感想は、銀賞の作品は割りと選びやすかったのですが、金賞に値する作品選定に苦労しました。

### 李鳳宇 (シネカノン)

今回の選考は作品本来の出来不出来よりも人物本位の選考になったような気がします。そういった意味では、これからは新藤兼人賞に相応しい人を選ぶという協会の基準を示した選考結果になりました。

大脚本家、新藤兼人氏から新進気鋭の脚本家である宮藤官九郎氏にトロフィーが渡るのも時代を象徴するひとつの変遷だと思えます。出来ればこの賞を励みに、これからも自由活発に監督業に臨まれること期待しています。